

2月の防除のポイント

令和6年1月25日
東京都病虫害防除所

主な作物の病虫害防除について、お知らせします。

<育苗期の病虫害対策>

施設内の雑草にはハダニ類、アザミウマ類及びコナジラミ類など多くの微小害虫が越冬しているため、育苗は雑草の無いきれいな施設で行いましょう。そろそろアブラムシ類の飛来が始まりますが、これは防虫ネットで防除可能です。害虫の飛来を見張るには黄色粘着トラップが有効で、アブラムシ類、アザミウマ類及びコナジラミ類等の発生状況がわかります。

また、育苗施設内や育苗土等の湿度が高くなると苗立枯病等の病害が発生しやすくなります。かん水は天気の良い午前中に行い、夕方までには茎葉の水滴が乾くようにするとともに、施設内の湿度を下げるため、必要に応じて適宜換気するようにしましょう。

<野菜類>

○ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ等）

1月の巡回調査では、施設栽培のイチゴでハダニ類の発生が確認されており、今後は増加期に入ります。多発してからの防除は困難なため、発生状況を把握し適切な対策を取りましょう。ハダニ類はスポット的に発生し、そこから広がる傾向にあります。散布剤の効果を確認するために、発生地点に目印を立て経過を観察することも有効な対策です。殺ダニ剤の多くは葉裏までしっかり噴霧しないと効果が発揮されません。葉の整理を行ったときが防除適期となります。天敵に影響が少ない剤を選択し、防除に努めましょう。

○ハクサイダニ

発生するのが真冬になるため発見しにくく、気付いた時には手遅れになりがちです。被害葉は銀白色となり、さらに加害が進むと枯死します。被害株には卵が多く産み付けられており再発生源になるため、発見次第抜き取って、焼却するか埋設するなど適切に処分してください。



図1 ホウレンソウに寄生するハクサイダニ



図2 ホウレンソウの被害

○ 灰色かび病

12月頃から本病の発生が見受けられるようになりました。1月の巡回調査では、施設栽培の花き類、イチゴで発生が確認されています。本病は施設内の過湿により発生が助長されますので、換気扇（循環扇）や温風暖房機を活用するなど、湿度を下げる換気管理に努めましょう。発生を認めたら防除指針を参考に薬剤散布を行いましょ。なお、耐性菌が発生しやすい病気なので、系統の異なる薬剤をローテーション散布するよう心がけましょ。

○ うどんこ病

ここ数年、作型に関係なく栽培の中～後期に本病の多発しているほ場が多くなっています。多発すると防除が困難となり、収量が低下する恐れもあるため、発生を認めたら防除指針を参考に薬剤散布を行いましょ。また、茎葉の過繁茂や肥料切れ等も発生を助長します。適切な栽培管理を行いましょ。

○ 菌核病

本病は、20℃前後の多湿条件下で被害が拡大しやすく、露地栽培で多く発生しますが、施設栽培でも1～3月にかけて発生が多くなる傾向にあります。作物が長時間濡れた状態になっている場合は急速に拡大し、防除が難しくなるため、換気や除湿等を行い、施設内の湿度をできるだけ低く保つようにして下さい。発生を確認した場合は菌核を形成する前に発病株を施設から外に持ち出す等、適切に処分し、防除指針を参考に薬剤散布を行いましょ。

また、露地では栽培終了後に放置されたキャベツやハクサイの残渣にも、ネズミの糞状の菌核が認められています。このような残渣は次年度の発生の原因となりますので、速やかにほ場から持ち出し、焼却するか土中深くに埋めましょ。



図2 菌核病の被害（露地キャベツ）



図3 菌核病の被害（施設キュウリ）

上記以外の病害虫についてのご相談は、電話（042-525-8236）又はEメール（S0200303@section.metro.tokyo.jp）にてお問い合わせ下さい。